

ときめき インタビュー



式守 伊之助 (しきもり いのすけ / Inosuke Shikimori)

…プロフィール…

本名・野内五雄さん。昭和34年12月23日、大阪府岸和田市生まれ。平成4年から越谷市在住。昭和50年2月、15歳で宮城野部屋に行司として入門し、同年3月「式守吉之輔」の名で初土俵を踏む。平成3年1月に31歳で「十両格」、平成23年11月、51歳で「三役格」への昇進を経て、平成25年11月、53歳で「立行司 第40代・式守伊之助」を襲名。平成27年3月、第37代・木村庄之助氏が引退したため、現在は一人で立行司を務めている。

日本の国技・大相撲は、横綱を筆頭とする力士たちが主役。その主役たちがいい相撲を取れるように、土俵の上でも土俵の下でも支えるのが「行司」という仕事。現在その行司職の最高地位である「立行司」を一人で務めている第40代・式守伊之助さんに、40年に渡る行司生活と角界について伺いました。

★力士での入門を断られ 行司の道へ

幼いころから相撲が大好きで、当時の大関・清國関の仕切りのきれいに憧れていたという伊之助さん。

「相撲は好き、でも勉強は嫌いという子どもでしたから、中学を卒業したら力士になろうと思っていました。卒業が迫ってきたころ、入門させてもらおうと相撲部屋を訪ねて回ったのですが、身長が165センチしかないものから、どの部屋からも断られてしまっ。その時訪ねた宮城野部屋で親方から、どうしても相撲の世界に入り

たいなら行司にならないか？ 行司になったら、番付表に名前が載るぞ！ と声を掛けられたのが、行司になるきっかけです」と伊之助さん。

そして宮城野部屋への入門が決まったのが、中学卒業直前の昭和50年2月。そのころ宮城野部屋には行司がいなかったため、一門である立浪部屋の行司(当



胸元に結ばれている紐の色「紫白」は、「式守伊之助」を表す階級色

★勝負を裁くのは 行司仕事のごく一部

相撲は好きでも、行司については「勝負を裁く人」という以外、ほとんど知識がないままの入門。入ってみて、仕事の幅広さや覚えることの多さに驚いたと言います。

「相撲は好き、でも、行司については、勝負を裁く人」という以外、ほとんど知識がないままの入門。入ってみて、仕事の幅広さや覚えることの多さに驚いたと言います。

かと同じく、

「観客のみなさんは、どちらが勝ったかを見ていてと思います。行司はどちらが負けたかを見て、その逆の力士に軍配を上げるのが鉄則。そのためには力士の動きに追われてはダメで、行司が力士を追いかけて見るのが基本です。そして私が特に心掛けていたのが、一番一番新たな気持ちで勝負に取り組むこと。たとえば差し違えなどの失敗をしても、反省は後回しにしてすぐに忘れて切り替える。前の勝負が頭に残っていると、正しい判断ができませんから。そういう伊之助さんには、理想とする裁き方があると言います。

「行司には決められた所作がありますが、動きは各自の自由なので、行司それぞれに味があってもいい。でも本来は自分の型にとらわれず、自然体で勝負の流れを見極めるのが名行司。常にそうあり



力士の名乗りを上げる時、軍配を握る手の甲を上にするのが木村型の「陰」。逆に手のひらが上になるのが式守型の「陽」の握り方

★本場所や巡業前には 必ず久伊豆神社にお参り

伊之助さんがご家族と越谷に住み始めたのは23年前。お子さんの

体調を考えてのこと。とだっただけです。「長男がぜんそくを患っていたの



伊之助さんが愛用している、軍配・帯刀・印籠。帯刀は立行司の昇進祝い家族から贈られたもの

で、自然が多くて学校が近いところ、そして私の国技館への通勤にも便がいいところと考えて、家内と相談して越谷を選びました。家内は越谷に来て子育てしやすかったようですし、長男も無事元気に成長しました」と伊之助さん。越谷のお気に入りの場所は久伊豆神社で、本場所や巡業が始まる前、必ず奥様とともに興行の無事と行司仕事に失敗しないことを祈願するそうです。

また越谷出身の幕下力士・阿炎さんについては、

「手足が長く懐が深い。体格がいいし、なかなかの男前で人気もありますよね。まだ21歳と若く、将来が楽しみな力士です。たとえば彼のような地元力士など、自分のひいきの力士を見つけて相撲を観ると、相撲の面白さや楽しみが広がると思います」と伊之助さん。

一時期人気に陰りが見えた大相撲ですが、最近では若い女性の観客も増えて活気を取り戻しています。年明け1月10日から始まる国技館

「相撲部屋の掃除や親方のお茶くみなど下働きをする以外にも、力士が場所の成績に合わせたもらう給金(褒賞金)の計算や、番付表や取組表に使われる(相撲字)という独特の文字を覚えるのが大変でした。そもそも読み書き、そろばんが苦手での世界に入ったのに、これは参ったなと。でも部屋



勝負をしっかりと見届けるために、力士の動きのクセを覚えて予測しながら動く。ベースボール・マガジン社(相撲)提供

には同世代の力士がたくさんいて、兄弟のように毎日ワイワイやっていたおかげで、辞めようとか家に帰りたいと思わず、続けて来られました。今も昔も変わらず、相撲の世界は力士も行司も床山も呼出しもみんな一緒に育っていく、家族のような集まりですから」と伊之助さん。

日本相撲協会の中には、伊之助さんをはじめ各部屋に所属する全行司の集まり(行司会)があります。行司の仕事は多岐に渡り、本場所中は取組の決まり手を伝える場内放送と、審判部が行う取組作りに必要な過去の対戦成績などのデータ提供も担当。場所後に各地

★力士を追いかけて動き 負けを見て、勝ちを上げる

勝負を裁くのは行司の仕事の一部ではあっても、当然ながら責任は重く、プレッシャーもひとしお。正しく裁くための心得は何

での初場所は力士の熱戦を観るとともに、土俵上で軍配を高らかに

掲げる伊之助さんの凛々しい姿にも注目しましょう。

型にとらわれず、自然体で動くのが「名行司」。 一番一番頭を切り替え、新しい気持ちで裁く。



横綱・日馬富士の土俵入りに立ち会う伊之助さん